

0. はじめに

チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）の条件副動詞は2つの形（短形 **-sAn** と長形 **-sAssĀn**）を持ち、他の多くのチュルク諸語とは異なり人称接尾辞が付かない。主に継起、条件、仮定を表わすほか、接語と共に用いられて譲歩や願望も表わしうる。本発表では、短形 **-sAn** と長形 **-sAssĀn** の異同に着目する。これについてはこれまで十分に研究されておらず、両形式とも同じ意味を表わすとしている先行研究もあれば、両形式に異なる訳をあてている先行研究もある。

本発表¹では、定量的調査および容認度調査の結果に基づき、長形はほぼ全ての機能において短形と置き換えが可能であるが、長形の出現頻度が全体の約 6%と著しく低いこと、一部表現で長形の容認度が低いこと、接続詞的表現や副詞的表現で両形式の頻度に平均からの偏りが見られることを示す。以上の調査結果に基づき本発表では、両形式が完全な自由変異であるとは言えないことを主張する。

本発表の構成は次の通りである。まず第1節で先行研究をもとに条件副動詞の形式と機能についてまとめ、問題提起を行う。次に第2節で短形と長形の異同に関する調査の方法と結果について述べる。最後に第3節でまとめと今後の課題を挙げる。なお、非日本語文献の翻訳、ラテン文字転写²、例文番号、グロス、文字飾り、表は特にことわりのない限り発表者によるものである。

1. 条件副動詞の形式・機能

チュヴァシ語の副動詞とされる形式には、形態的に分析不可能なもの³と分析可能なものがある³。本研究で対象とする条件副動詞⁴は前者である。チュヴァシ語の条件副動詞の特徴的な点は、形式面では短形 **-sAn** と長形 **-sAssĀn**⁵ を持つ点と人称標識が付加しない点、機能面では条件・仮定だけでなく継起も表しうる点である。以下の表1に、チュヴァシ語の分析不可能な副動詞と、他の主なチュルク諸語の代表としてタタール語（北西語群）の対応する副動詞を挙げる。

表1：チュヴァシ語とタタール語の分析不可能な副動詞

	チュヴァシ語	タタール語
先行「～して」	-sA	-(E)p
継続・反復「～しながら」	-A	-A/-y
継起「～すると」	-sAn	-GAč
条件・仮定「～すれば」	-sAssĀn	-sA+人称

¹ 本研究は JSPS 科研費（研究課題 23KJ1014）の助成を受けている。また、本発表にあたってアクマタリエワ・ジャクシルク氏、江畑冬生氏、菅沼健太郎氏、日高晋介氏から有益なコメントを頂いた。深く感謝申し上げます。

² 例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜体で示す。

³ チュヴァシ語の伝統文法では、副動詞を「古くからある副動詞」（分析不可能な副動詞に相当）と「新しくできた副動詞」（分析可能な副動詞に相当）の2つに分類している。

⁴ 先行研究での名称は様々であるが、条件の用法で用いられる頻度が高いこと、他のチュルク諸語の対応形式が条件形と呼ばれることを考慮し、本発表では条件副動詞と呼ぶことにする。

⁵ 母音調和による異形態（短形：**-san/-sen**、長形：**-sassān/-sessēn**）を持つ。本稿で用いる接辞の代表形は、交替する部分を大文字で表す。

チュヴァシ語の条件副動詞は、継起「Aすると(Bした)」、条件「Aすれば(Bする)」、仮定「Aすれば(Bするのに)」を表わすほか、添加の接語 =tA とともに譲歩「～しても」、過去の付属語 =(č)čë とともに文末で願望「～すればいいのに」を表わす⁶。以下に先行研究に挙がっている例を用法別に示す⁷。

- (1) Văl kala-ma čarän-san, äna äytu-sem pa-č-ěš.
 それ 話す-INF やめる-CVB それ.DAT/ACC 質問-PL 与える-PST-3PL
 「彼が話すのをやめると、彼に質問がなされた。」(継起) (Clark 1998: 446)
- (2) Šüre-sen šüre-sen pěr yuman patne šit-ně.
 歩く-CVB 歩く-CVB 一 オーク もとに 着く-PRF
 「(長い時間) 歩きに歩くと、一本のオークの木に辿り着いた。」(継起) (Krueger 1961: 165)
- (3) Epir yapala tuyan-san šav yapala xak-ne kura
 1PL 物 買う-CVB それ 物 価値.3.POSS-DAT/ACC よって
 ača-na=ta kăštax payta pul-at'.
 子-DAT/ACC 少し 利益 ある-PRS.3SG
 「私たちが物を買えば、その価値によって子供にも少し利益が生じる。」(条件)
 (Sergeev, Andreeva and Kotleev 2012: 395)
- (4) Věren-me-sen šäpata xuš-ma=ta pěl-ey-m-ën
 学ぶ-NEG-CVB わらじ 編む-INF=も 知る-PSB-NEG-FUT.2SG
 「学ばなければ、わらじを編むこともできない。」(条件) (Sergeev, Andreeva and Kotleev 2012: 395)
- (5) Šinčex tuxtär patne kay-nä pul-san, čērĕl-čččë=i ten man ača?
 すぐ 医者 所に行く-PRF である-CVB 治る-SUBJ.3SG=Q 多分 1SG.GEN 子
 「すぐ医者に行っていたら、私の子供は治っていただけだろうか？」(仮定) (Clark 1998: 446-447)
- (6) Pirĕn yal pīsāk te-sen=te yur-at'.
 1PL.GEN 村 大きい と言う-CVB=も 適う-PRS.3SG
 「私たちの村は大きいと言ってもよい。」(譲歩) (風間・菱山 2020: 220)

本研究では、短形と長形の異同に着目する。これについては、これまで十分に研究されているとは言えない。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 397) は両形式について、「意味の点で互いに異なっておらず、両形式とも同じ意味を持つ」と記述し、両形式が共起する以下の例などを挙げているにとどまる。

⁶ 表されているものが過去の事実であれば継起、実現可能性のある現在・未来の事柄であれば条件、実現可能性のない現在・未来の事柄や、事実と反する過去の事柄であれば仮定とした。

⁷ Clark (1998: 446) は当該の副動詞が時間節と(主動詞が間接法形式の場合は)条件節を標示するとし、(1, 5)を挙げている。Krueger (1961: 165) は当該の副動詞が反復されることに言及し、(2)を挙げている。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 395) は当該の副動詞が時間・条件を表わすが、否定形は常に条件を表わすとし、(3, 4)を挙げている。

- (7) *ěš-sem pět-sessěn, ye kăšt ĭvăn-san*
仕事-PL 終わる-CVB または 少し 疲れる-CVB
「仕事が終わったら、または少し疲れたら」

(Sergeev, Andreeva and Kotleev 2012: 397)

両形式に異なる訳をあてている先行研究も存在する。ドイツ語で書かれた先行研究 Benzing (1963: 70) は、短形の訳語として *wenn* (when)、長形の訳語として *nachdem* (after) を用いており、*kil-sen* を *wenn man kommt, als man kam* (when one {comes/came})、*kay-sassăn* を *nachdem man gegangen ist/war* (after one {has/had} left) と訳している。しかし、記述は2行のみであり、短形が *after* 節、長形が *when* 節にあたる意味を表わす例も見られる。

本研究は、コーパスを用いた定量的調査と用例分析により、両形式の頻度および用法における異同を詳細に明らかにすることを目的とする。

2. 短形・長形の異同に関する調査

2.1. 調査方法

まず、チュヴァシ語のオンラインコーパス *Čavaš čelxin ikčelxellě šüpši* (チュヴァシ語 2 言語コーパス)⁸ を用いて、短形と長形の全体的な頻度および用法別の頻度を調べた。調査手順は以下の通りである。

A. 全体的な頻度

コーパスにおいて出現頻度が高い基本的な動詞 (*pul-*「なる、である」、*te-*「～と言う」、*kala-*「話す」、*kur-*「見る」、*šit-*「達する」、*kay-*「行く」、*il-*「取る」、*tux-*「出る」、*păx-*「見る」、*tu-*「する」など) の条件副動詞形 (短形と長形それぞれ) を入力して検索し、ヒット数を調べた。

B. 用法別の頻度

全体的な頻度の調査で短形と長形の合計数が最も多かった *pul-*「なる、である」、長形の比率が最も高かった *te-*「～と言う」、長形の比率が最も低かった *kala-*「話す」を対象とした。まず、これら3動詞の条件副動詞形 (短形と長形それぞれ) を入力して検索し、*pul-* は短形と長形を100例ずつ、*te-* と *kala-* は短形と長形を50例ずつ抽出した。次に、抽出した例における条件副動詞の用法と、主節述語など文中で共起する要素を調べた。必要に応じて、特定の表現のヒット数を完全一致検索で調べた。

次に、コーパスから抽出した一部例文の短形を長形に置き換えたものをコンサルタント2名 (チュヴァシ共和国出身の男性 A. G. 氏および女性 A. S. 氏) に提示し、容認度を調べた。

2.2. 調査結果

全体的な出現頻度に関する調査の結果、動詞によって差があるが、長形の出現頻度は平均で全体の

⁸ 総語数約1452万語 (2023年3月29日現在)。タグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。検索窓は一つのみ。2023年3月現在、リアルタイムで更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。本稿で出典の明記されていない例は、本コーパスから抽出されたものである。

5.9%と著しく低いことが分かった⁹。表 1 に、条件副動詞形のヒット数が最も多かった動詞 10 個の調査結果を示す。

表 1：調査結果（全体的な出現頻度）

		短形	長形	短形+長形
pul-	なる、である	30120	1384 (4.4%)	31504
te-	～と言う	11940	1422 (10.6%)	13362
kala-	話す	4560	58 (1.3%)	4618
kur-	見る	3658	280 (7.1%)	3938
šit-	達する	3392	288 (7.8%)	3680
kay-	行く	3152	218 (6.5%)	3370
il-	取る	2353	107 (4.3%)	2460
tux-	出る	2219	168 (7.0%)	2387
pāx-	見る	2015	108 (5.1%)	2123
tu-	する	1949	88 (4.3%)	2037
合計		65358	4121 (5.9%)	69479

用法別の頻度に関する調査の結果、短形だけでなく長形も、条件・仮定・継起、(接語とともに) 譲歩・願望¹⁰を表わしうることが分かった。両形式の用法別頻度で特に目立った差異を以下に挙げる。

pul- 「なる、～である」

- ・(8) のような対比「～である一方」の例は、短形で 100 例中 4 例 (4%) に対し、長形は 100 例中 0 例。
- ・定形動詞に後続する例は、短形で 100 例中 26 例 (26%) に対し、長形は 100 例中 15 例 (15%)。

(8) «Čávaš piki» *konkurs-ra* *xěr-sem* *āmārt-aššě* **pul-san,**
 ミス・チュヴァシ コンクール-LOC 女性-PL 競う-PRS.3PL である-CVB
 ku *konkurs-a* *vara* *kaččā-sem-šěn* *yěrkele-ně.*
 この コンクール-DAT/ACC は 男性-PL-PURP 催す-PRF
 『「ミス・チュヴァシ」コンクールでは女性が競う一方、このコンクールは男性のために催される。』

⁹ 動詞を 12 個加えて算出した長形の割合は 5.8%であった。さらに多くの動詞を加えて算出しても、長形の割合は 6%弱に収束することが予想される。なお、否定接辞 -mA と共起した否定形 -mA-sAn / -mA-sAssĀn を調査したところ、長形の割合は 5.0%であった (表 1 に挙げた 10 動詞の当該形式の出現数は合計 1775 例で、そのうち短形が 1687 例、長形が 88 例であった)。肯定形に接語 =Ax が付加した形 -sAn=Ax / -sAssĀn=Ax (主に即時性のニュアンスが加わる) を調査したところ、長形の割合は 5.5%であった (調査対象 10 動詞の当該形式の出現数は合計 2421 例で、そのうち短形が 2287 例、長形が 134 例であった)。

¹⁰ pul- の条件副動詞形 (短形・長形) に過去の付属語を付加した形式 *пулсанччĕ, пулсассĕнччĕ* (pul-san=ččĕ, pul-sassĕn=ččĕ) 「なればいいのに、～であればいいのに」を入力して検索した結果、短形が 170 例、長形が 14 例抽出された (長形の割合は 7.6%)。

te- 「～と言う」

・例の大半を占める接続詞的表現 *měšēn te- {sen/sessēn}* 「なぜなら (lit. なぜかと言えば)」は、短形が 7326 例に対し長形は 1072 例 (長形の割合は 12.8%)。

kala- 「話す」

・ *těressipe kala- {san/sassān}* 「正確に言えば」や *pěr sāmāxpā kala- {san/sassān}* 「一言でいえば」のように文全体を修飾する副詞的表現は、短形で 50 例中 44 例 (88%) に対し、長形は 50 例中 19 例 (28%) (先述の 2 つの表現は、短形が合計 1306 例に対し長形は 1 例)。

定形節に後続するコピュラ動詞 *pul-* の条件副動詞形は接続詞的であると言える (短形 *pulsan* はこの形で辞書に載っており、訳語としてロシア語の接続詞 *jesli* 「もし」があてられている)。この接続詞的用法では短形の割合が平均より高いことが示唆され、これが *pul-* で長形の割合が平均よりやや低い一因であろう。te- 「～と言う」で長形の割合が比較的高いのは、頻出の「なぜなら」を意味する接続詞的表現で長形が平均の約 2 倍の割合で出現するため、kala- 「話す」で長形の割合が著しく低いのは、頻出の副詞的表現で専ら短形が用いられるためであると言える。

加えて、条件副動詞の前後に同じ語が現れる「A であれば A」(例: *balkon pul-san balkon* 「バルコニーであればバルコニー」)、「B と言えば B」(例: *payan te-sen payan* 「今日と言えば今日」) のような表現が数例抽出されたが、これらではいずれも短形が用いられていた。(2) のように同一の条件副動詞が反復した例は短形・長形ともに 1 例も抽出されなかった。

長形が抽出されなかった用法に関して行った容認度調査の結果、長形に置き換えて容認不可となった例文はなかったものの、多くはいずれかのコンサルタントが短形の方がよいと回答した。同一の条件副動詞が反復された (2) のみ、2 名とも短形のほうがよいと回答した。

3. まとめと今後の課題

長形はほぼ全ての機能において短形と置き換えが可能であるが、長形の出現頻度が全体の約 6%と著しく低いこと、一部表現で長形の容認度が低いこと、接続詞的表現や副詞的表現で両形式の頻度に平均からの偏りが見られることから、発表者は両形式が完全な自由変異であるとは言えないと考える¹¹。

今後の課題として、長形の低頻度の要因の解明 (経済性や文体など、考えられる諸要因の検証)、両形式の通時的発展の解明 (古代チュルク語や現代チュルク諸語の対応形式からの類推で、長形が改新形式である可能性が考えられるが、その発展過程は不明である)、長形と焦点の関係など情報構造に関する調査が挙げられる。以下は同じ文中で短形を長形に言い直している例であり、強調したい部分が長形で言い直されている点が注目される。

(9) *Šīn ęšle-sen tože purān-at', ęšle-sessēn.*
人 働く-CVB また 生きる-PRS.3SG 働く-CVB

¹¹ 条件副動詞と同様に短形と長形を持つ接辞に不定形が挙げられる (短形 *-mA*、長形 *-mAškĀn*)。発表者の調査によると、不定形は長形の頻度が全体の 5%以下と著しく低いという点で条件副動詞と類似しているが、生起位置と機能により明確な偏りがある (短形が述語に隣接する例の割合が高いのに対し、長形は述語から離れた位置で副詞的に用いられる例の割合が高い)。

なお、付属語 =tĀk はコピュラ動詞 pul- の条件副動詞形と類似の機能を持ち、これとの異同の調査も今後の課題である。A. S. 氏によると、以下の例文で 3 形式は置き換え可能で、意味も同じであるように感じられるという。

- (10) Unān vīrān-ĕ-nĕc pul-nā {**pul-san** / **pul-sassān** / =tāk}
 それ.GEN 場所-3.POSS-LOC いる-PRF である-CVB である-CVB =COND
 śav utām-a tāv-ay-att-ām=čĕĕ=ši?
 その 行動-DAT/ACC する-PSB-PST.PROG-1SG=PST=Q
 「彼の立場にいたなら、私はその行動をできていただろうか？」

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PRF	perfect	完了
ACC	accusative	対格	PROG	progressive	進行
COND	conditional	条件	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PSB	possibility	可能
DAT	dative	与格	PST	past	過去
FUT	future	未来	PURP	purposive	目的格
GEN	genitive	属格	Q	question	疑問
INF	infinitive	不定形	SG	singular	単数
LOC	locative	位格	SUBJ	subjunctive	反実仮想
NEG	negative	否定	-		接辞境界
PL	plural	複数	=		接語境界
POSS	possessive	所有			

参考文献・調査資料

- Benzing, J. (1963) Das Tshuwaschische. In G. Annemarie von et al. (eds.) *Turkologie*, 61-71. Leiden, Köln: E. J. Brill.
- Clark, L. (1998) Chuvash. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 434-452. London, New York: Routledge.
- Čävaš čĕlxin ikĕĕlxellĕ śüpśi [チュヴァシ語 2 言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2023/3/29]
- 風間伸次郎・菱山湧人 (2020) 『チュヴァシ語の言語と文化 1』アルタイ言語文化論集 1. 東京: 東京外国語大学.
- Krueger, J. (1961) *Chuvash Manual. Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 7, The Hague: Mouton.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čävaš čĕlxi: čävaš filologi fakul'tečĕn studenčĕsem valli xatĕrlenĕ vērenü kĕneki*. [チュヴァシ語: チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čävaš kĕneke izd-vi.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.